

# 留学生を対象とした情報リテラシー教育に関する研究調査 —長崎短期大学を事例に—

## A Study about the Information Literacy Education for the International Students - In the case of Nagasaki Junior College -

ミヤッカラヤ・星野 徳明  
Myat Kalayar・Hoshino Noriaki

### 要旨

近年、日本の大学等に留学する外国人は増加している。日本の大学では、異なった日本語レベルの留学生を受け入れており、長崎短期大学も例外ではない。その中で、情報活用能力の育成や研究支援の立場から、日本語を母国語としない留学生への情報教育の必要性は無視できない。筆者らは、日本の教育機関で勉強する留学生にとって、高速かつ正確な日本語入力の方法を早期に獲得することは日本語の学習に有効であると考えている。また、情報の収集・分析・発信する力といった情報リテラシー<sup>1</sup>を身に付けることはレポートの作成などにおいて極めて有用なものである。

本稿では、第一報として、筆者らが長崎短期大学における留学生をとりまく情報化の現状を把握するために行なったアンケート調査や聞き取り調査の結果を報告する。

キーワード : 留学生、情報リテラシー、授業、短期大学

### I はじめに

日本学生支援機構（JASSO：Japan Student Services Organization）の留学生受け入れの状況によると、2009年5月1日現在の留学生の数は過去最多数の13万2720人である<sup>2</sup>。在学段階別留学生数は図1の通りである。1984年に留学生10万人構想が打ち出されて以来、日本の高等教育機関は、多かれ少なかれ留学生受け入れに躍起になってきた。さらに、「グローバル戦略」展開の一環として2020年を目途に留学生受け入れ30万人を目指すと2008年7月29日に日本政府が発表した影響もあり、近年、日本の大学等に留学する外国人は急増している。また、日本の少子化対策も拍車をかけ、留

---

<sup>1</sup>「リテラシー : literacy」とは、本来「識字力＝文字を読み書きする能力」である。「情報リテラシー」の定義は論者によって異なるが、ここでは、コンピュータをツールとして有効に活用すると同時に、情報をいかにして収集、整理、分析、加工、伝達していくかといった情報活用能力全般を意味する。

<sup>2</sup>日本学生支援機構ホームページ、2010年3月28日アクセス  
「[http://www.jasso.go.jp/statistics/intl\\_student/data09.html](http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data09.html)」

学生の量的確保に奔走しているが、留学生受け入れのための質的な体制整備の遅れが目立つ。一般的に留学生が来日前に日本語の基礎的な学習を終えてくることが望まれるが、現状は自国での日本語学習が不十分であり、来日してから学習を始めるケースが少なくない。そのような異なった日本語レベルの留学生を日本の大学では受け入れている。その中で、情報活用能力の育成や研究支援の立場から、日本語を母国語としない留学生への情報教育の必要性は無視できない。

ユビキタス時代において、日本語入力に必要なスキルとして高速かつ正確なキータ입は必要不可欠になっている。日本の教育機関においても、コンピュータを利用してレポートなどを作成し、ネットを介して作品を提出することも増加している。また、留学生・就学生のみならず、グローバル市場拡大に伴い中国などに進出した企業が増え、日本の会社で就職する外国人も増加している。日本の会社では日本人顧客を対象とした電話対応、メールのやり取り、データ入力業務が中心となっているため、正確かつスピーディな日本語入力が必要不可欠なスキルとして重視されている。しかし、多くの留学生、特に中国人の留学生は漢字の知識はあるものの、日本語の発音をあやふやに覚えているため、思い通りの熟語が入力できないのが授業中に多々見られる。

長崎短期大学（Nagasaki Junior College、以下「NJC」）では 2000（平成 8）年度から本格的に留学生の受け入れをはじめた。当初は数的にわずかなものであったものの、2010（平成 21）年度 10 月現在、101 名（21.3%）が本学に在学している。留学生の出身国は中国が 96%、次いで韓国が 3%、ミャンマーが 1%である。また、留学生の所属は英語科が 90%、次いで食物科 10%となっている。本格的に留学生の受け入れをはじめてからは、学内的には留学生担当教員を配置する、充分とはいえないが、留学生専用のコンピュータを設置するなどの対応を取り、留学生の指導に全学的に当たるような体制を整えてきた。

本格的に留学生を受け入れるようになってから 10 年目になるこの時期に、外国人留学生のコンピュータやインターネットの環境などに関する情報を得ることを主な目的としてアンケート調査を実施した。その結果は、教育内容の改善の材料として参考にする一方で、留学生の日本語の効果的な指導のための資料として利用する。

図 1 在学段階別留学生数

教育機関	人数	前年度の比例
大学院	35,405 人	2,739 人（8.4%）増
大学（学部）・短大・高专	67,108 人	3,933 人（6.2%）増
専修学校（専門課程）	27,914 人	2,161 人（8.4%）増
準備教育課程	2,293 人	58 人（2.6%）増

出典：日本学生支援機構、平成 21 年度外国人留学生在籍状況調査結果より筆者作成

## Ⅱ 本学の情報基礎科目および情報機器環境の状況

### 1. 情報基礎科目

本学は、英語科、保育学科、食物科の3つの学科から構成されている。これまでの情報教育は次のように進められてきている（松永 2004：p.116）。まず英語科と食物科で1988年（昭和63年）より講義科目「情報処理論」、演習科目「事務機器実習」として始まり、以降、保育学科でも1996年（平成8年）より「コンピュータ演習」として情報教育科目を開講した。現在は情報処理の授業として、「ワープロⅠ、Ⅱ」、「文書作成基礎」、「マルチメディア論」、「表計算基礎」、「オフィスプレゼンテーション」が1年次に、「OA機器実習Ⅰ、Ⅱ」、「オフィスプレゼンテーション」、「コンピュータ応用」、「コンピュータ演習」が2年次に用意されている。つまり、これまで行なわれてきたパソコンや応用ソフトの基本操作、インターネットに関する基礎知識を主な内容とする「コンピュータリテラシー」をはじめとしたコンピュータ関連科目に、Webの利用による情報収集・分析・加工・作成や情報モラルを主とする「情報リテラシー」科目の大幅な拡充および新設が行われている。

筆者は情報リテラシーの担当者として、また留学生指導担当者として、留学生に関わってきた。情報リテラシーの教育も日本語の学習も授業の一環として行っている。これは、多くの留学生が本学を卒業後に目指す4年生大学への進学時に必須の技能である「日本語によってコンピュータを活用する能力」を養成するものである。筆者らは、日本語を学習する一環として、ワープロの実践が有効であると考えている。日本語の文章をワープロで入力する場合、漢字の正しい読み方を知らないという大きな壁がある。日本語能力の高い留学生の読み間違い、漢字変換も正しくできないケースは授業中に多々見受けられる。日常会話では曖昧な発音で通用しても、ワープロに入力する際には一文字一文字の正しい読み方を正確に入力できないと、正確な漢字が表示できないのである。そのため、本学では、留学生を対象に毎週1回ワープロの授業を行っている。「コンピュータ関係の科目」として、留学生1年生を対象に「ワープロⅠ・Ⅱ」、留学生2年生を対象に「OA機器実習Ⅰ・Ⅱ」を設置している。来日したばかりの留学生1年生には、前期はワード、後期はワードとエクセルを並行に授業を行っている。2年生の留学生には、ワード、エクセルの復習をしながら、これから情報化社会で必要不可欠な情報リテラシーの技術やプレゼンの技術向上するための授業を行っている。主な習得目標は、①コンピュータに対する正しい知識と操作方法、②日本語の応用ソフト（ワード、エクセル、パワーポイント）による文書・資料作成能力、③インターネットの活用方法、その危険性とその対処法の3点である。

授業内容は、すべてのクラスで、メール、タッチタイピング、ペイント、ワード、インターネット、情報モラルを1年次の前期で行っている。後期では、タッチタイピング、インターネット、情報モラル、エクセル、プレゼンテーション、情報収集・分析・加工・作成などを行っている。各クラスの講義内容はほぼ同じであるが、レベルに応じて課題などの難度に変化を与えている。特に2年次に実施しているOA機器実習においては、プレゼンテーションの講義を主に行っている。それは、留学生の中には、プレゼンテーションを行う上で日本語に対する自信や経験の不足などから、プレゼンテーションの授業への積極的な参加に困難を感じている学生が多いためである。

前述したように、本学を含め多くの日本の大学では、異なった日本語レベルの留学生を受け入れているため、留学生指導において、対象となる留学生の言語、文化、目的、レディネス（教育準備性）、私生活などが非常に多様である。特に情報関連科目において学習進度の差が著しく、8年前から必修科目の「情報処理科目」については留学生と日本人学生を分けて、留学生を対象としたカリキュラム

で実施することになった。留学生に情報リテラシー教育を行う上で、レベル的には日本人と比べて特に大きな差異はないが、日本語の理解や日本語入力に慣れるまで時間がかかることが多い。日本語の文字をローマ字で入力する場合や平仮名から適切な漢字を選択する事に時間を要している。

情報系の資格として、パソコン入力スピード認定試験（主催：財団法人全国商業高等学校協会）、ワープロ検定試験（主催：財団法人全国商業高等学校協会）を薦め、これらに関するスキルが取得できるような技術試験を実施している。

## 2. 情報機器環境の状況

授業で使用するコンピュータールームは、48人受講可能な端末室（OA室：Office Automation）と27人受講可能な端末室（OP室：Office Presentation）が2部屋ある。授業は1クラスの生徒1人に1台ずつパソコンが使用できる環境があり、30名ぐらいの生徒を教師1人で担当しているが、2人で担当する場合もある。OA室は主に授業を中心に使用しているが、OP室は学生の自習やレポート作成、インターネットの使用が自由にできるようになっている。利用時間は、平日は、月曜日から金曜日までは、7時半から18時まで、土曜日は9時から15時までとなっているが、学期末には提出課題作成などのため、遅くまで使用させざるを得ない。

NJCで使用されている基本・応用ソフトの環境は下記の通りである。

図2 NJCで使用されている基本・応用ソフトの環境

OS	Windows XP Professional
日本語入力	Microsoft IME Standard
ワープロ	Word2002
表計算	Excel2002
プレゼンテーション	Power point2002
Web ブラウザ	Internet Explorer(ver.7.0.5730.13)



写真1 OA室における留学生の授業の風景

### 3. 留学生の情報処理クラス編成

授業は、2クラス編成とし専任教員2名が担当している。今期の40名の学生は、ワードの知識は自国で学習を行っていたこともあり、全くの初級ではないが、日本語力のレベルが非常に低下している学生が多いため、ワープロの初級レベルの学生と同じカリキュラムで授業を行うことに問題はなかった。また、留学生が授業時間外にコンピュータの勉強に取り組める環境として、2008年からはWindowsXPマシン4台を追加し、主に留学生の利用を前提にインターネットに接続している。また、印刷可能なレーザープリンタも1台設置している。

### 4. 現状の問題点

以前ほどではないが、昨年までの問題点として、一部の留学生は、①指定したソフトウェア以外のソフトウェアをインターネット経由でインストールする、②OA・OP室のパソコンの言語設定を勝手に変更する、③中国人留学生がよく閲覧する中国のサイトからウィルスが侵入し、インターネットのセキュリティ対策が万全でない状態が続いたため、授業に障害が生じるなどが挙げられる。アンチウイルスソフトとしてウイルスバスターをインストールしているが、万全ではなく、最悪授業にも影響してしまうこともあるため、OA・OP室以外に学生、特に留学生専用のパソコンやインターネット環境を整備した。

## Ⅲ 調査の概要、アンケートの集計結果と分析および考察

### 1. 調査目的、方法および期間

本学において、留学生をとりまく情報化の現状、留学生のコンピュタリテラシーおよび情報リテラシー能力を把握するため、NJCに2009年(平成21年)度に入学してくる新入生を対象にアンケート調査を行なった。実施方法は、各授業の最後のホームルームにアンケートを実施した。回答はマークシートに記入する方式で、回答用紙はその場で回収した。39名の在学生のうち出席者の37名(男性:26名、女性:11名)の回答用紙が回収できた。

### 2. 項目ごとの結果および考察

本学に2009年(平成21年)度入学者に対し、大別して以下の7項目について調査した。

- (1) 日本語の学習期間
- (2) 自国における小学校・中学校・高校での「情報教育」の学習状況
- (3) NJCに入学するまでの「情報教育」の学習内容
- (4) NJCに入学するまでの「応用ソフト」の理解度
- (5) 現在、自宅でのパソコンの有無
- (6) 現在、自宅でのインターネット接続の有無
- (7) 1週間のパソコン利用時間

筆者らが実施したアンケート調査、対面的聞き取り調査結果および経験などから下記の点が明らかになった。

(1)の結果より、ほとんどの新入生は日本語学習期間が3ヵ月から6ヵ月であるということがわかった。日本語学習期間が短期にもかかわらず、本学に入学させることは、日本語能力がやや低くとも



日本の大学で学ぶ意欲の高い者であるとみなしているからである。日本語の学習期間が短いことは、日本の高等教育機関で専門科目を学習するときに、単なる日本語能力が不十分の問題ではなく、専門分野に関する理解の難しさに影響する。特にコンピュータのような情報の分野においては、常に難解な漢語・カタカナ語の専門用語が多く含まれている。専門分野と関連付けた日本語は、専門分野に関する学習を円滑にする効果を果たすと同時に、大学卒業後を見越し、学生が自分の進路を見出す手がかりとなる。

(2)(3)(4)の結果より、本学に入学前にほとんどの学生は文書作成、表計算の経験があり、若干ではあるが、パワーポイントの経験をもつ学生も存在する。しかし、それらの応用ソフトの理解度に対して初等教育期間中にワードやエクセルなどの基本的な操作方法を習ったが、身に付いていないという学生も多く見受けられた。また、高等教育機関で身につけるべき技術は熟知されていない。中には、若干ではあるが Web ページ作成、プログラミング、アクセスなどを体験した留学生も存在している。

(5)(6)(7)の結果より、ほとんどの留学生が自宅にインターネットを使える環境を有していることがわかった。彼らが、インターネット環境下でコンピュータを利用する主な目的は、学習することより、むしろ母国や外国との連絡や映画、音楽鑑賞、チャットなどである。ほとんどの学生は何らかの形でインターネットを利用しており、中では1日5時間以上もインターネットを使ってレクリエーションしていることもわかった。

インターネットが使える環境として、下記の要因がそろったからであると考えられる。

①インターネットやIT環境の普及に連動してパソコンの所有率は年々上昇していることもあり、特に留学生はほとんどの部屋にコンピュータやインターネットの環境が揃っている。留学生、特に中国人の場合、一つの部屋に2人なし3人が共同生活をしているため、彼らは安価でインターネットが使える環境にいる。

②ここ数年、特に3・4年前に比べ、NJCに在学している中国からの留学生は比較的裕福な家庭出身が多いため、母国との連絡をするのに必要なOA機器やインターネットが使える環境の形成が経済的に容易である。

彼らは、普段異国にいる友人らとチャットをしているため、母国語(中国語)のタイピングについては早いものが多い。しかし、日本語入力には、変換ソフトを使うため、画面を見て「かな」漢字変換が望み通り進んでいることを確認しながら書きこむことが必要であるため、キータッチが速いことは、日本語の文書作成の速さとはならない。ところが、彼らの中には、自分はコンピュータができると勘違いしている学生が数多く存在する。留学生は1年次の「ワープロⅠ・Ⅱ」を受けたものの、時間割の関係もあるが、2年生の「OA機器実習」をほとんど受けていない。受講している学生のワードのレベルはやや高いが、高度なエクセルやパワーポイントになると、ほとんどできない。情報リテラシーといった、情報の収集・分析・発信やモラルはなおさらである。また、彼らは放課後自分の部屋に戻ると、skypeを使ったテレビ電話、母国語を使ったゲームや、チャット、母国の映画・音楽鑑賞などを行っている。つまり、テレビを購入しなくてもインターネットにつながっているコンピュータがあれば、寂しさを和らげることができるし、自国の情報を自由な時間に収集することができる。テレビであれば、日本語で映画を見たり、ニュースを聞いたりできるため、日本語力の向上にもつながると同時に日本の文化に触れることもできる。が、ネットのみの利用のためそれができない現状である。

また、本学に入学してから約半年は、日本語能力が不十分であることや佐世保という地域性もあり、

アルバイトをしている学生は少ない。アルバイトをしていないということは、勤務先での日本人とのつながりも薄いということになり、日本語を学ぶ機会が少ないという問題となっている。

#### Ⅳ まとめ

日本語を母国語としない留学生への情報環境を把握するため、2009年（平成21年）度に入学した留学生を対象に調査を行い、アンケートの結果を項目別に整理し考察した。その結果、本学に入学するまでに、ほとんどの留学生はコンピュータの経験を持っていること、自国の小中高校で習ってくる教科「情報」内容の差、情報環境の差、学科の差、出身地によりばらつきがあることなどが明らかとなった。また、ほとんどの留学生はパソコンを所有し、自宅でインターネットを使用可能な環境ができています。ところが、ほとんどの留学生が使用しているOSの環境は母国語であるため、自宅でコンピュータを使って日本語の環境で予習や復習がほとんどなされていない。留学生にとってコンピュータ、特に、インターネットを利用することは大きな意味をもっていることは言うまでもない。彼らの多くは母国のニュースを知りたいと思っており、ウェブで自分の国の新聞社にアクセスすれば、簡単に早く無料で情報を知ることができる。そのため、彼らは自宅で、インターネットに接続されているコンピュータを利用し、インターネット電話、チャット、ゲーム、映像や音楽などといったレクリエーションのために利用している。また、留学生の日本語力がなかなか伸びない主な理由として、学習意欲が低下していることも考えられるが、放課後同国の人が住んでいる寮に戻り母国語で交流し、部屋でインターネットを利用し、ゲームやチャットしていることが一番の要因であると考察できる。彼らに、コンピュータはレクリエーションのみでなく、どのようにしたら学習に結び付けることができるかが今後の課題である。

今回の留学生を対処とした情報リテラシー指導に関する調査は、研究調査というよりも、むしろ実践記録といえるものであるが、まだまだ初歩的な段階である。さらに検討・改正を加えていきたい。

#### 引用・主な参考文献

- 沖裕貴・林徳治（1996）、「短大における情報教育の実施にあたってアジアからの留学生の抱える問題点（＜海外における情報教育＞）」、日本教育情報学会、pp.2-5。
- 大橋真由美・山本健一（2005）、「日本語ワープロ学習における指導法の展開」『岐阜市立女子短期大学研究紀要第54輯（平成17年3月）』、pp.33-39。
- 金久保紀子・亀田千里（2004）「筑波女子大学留学生実態調査報告」『東京家政学院筑波女子大学紀要第8集』、pp.95-107。
- 柴田幹夫・藤田益子「コンピュータを利用した留学生教育（授業報告）」2009年10月10日アクセス「[dspace.lib.niigata-u.ac.jp:8080/dspace/.../KJ00000046315.pdf](http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp:8080/dspace/.../KJ00000046315.pdf)」
- 茂住和世（1997）、「我が国の留学生政策と大学教員の留学生指導に関する一考」『東京情報大学研究論集』、Vol.1 No.2、pp.155-166。
- 真下知子・林徳治（1995）、「外国人留学生を対象としたコンピュータリテラシー指導に関する研究：アジア留学生への日本語ワープロ指導を通して」、年会論文集、日本教育情報学会、pp.54-57。
- 真下知子・林徳治（1996）、「外国人留学生を対象としたコンピュータリテラシー指導に関する研究

(その2): アジア教育関係留学生を対象とした CAI 教材作成学習の指導を通して」、日本教育情報学会、pp.6-9。

松永一臣 (2004)、「短期大学卒業生の IT 環境及び意識調査 (1)」『長崎短期大学研究紀要 第 16 号』、pp.117-124。